竹千代賞

奇跡のステージ

市川キアンホベル

私は去年、バンド演奏で合同文化祭のステージに立った。合同文化祭とは、近隣の定時制・通信制高校が集まって行う、大規模な文化祭である。今までステージに立ったことも楽器経験もない私が、あんなに大勢の前で楽しく演奏できたことは、未だに信じがたい。そもそもこのステージに立つまでには様々な困難があり、発表できたことは奇跡だと思っている。

バンドを始めようと思ったきっかけは二年前の文化祭。他校のバンドを見て感動し、同じように感銘を受けていた友人や担任と、勢いでバンドを結成した。各々やりたい楽器が違ったため楽器争奪戦をすることなく、結成前解散は免れた。担任がドラム、友人はベース、私は元から興味があったギターである。そしてもう一人のクラスメイトがボーカルを担当してくれることになった。思い返せばスムーズに進んだのはこの結成までだった。最初の問題は練習する環境が整っていないこと。私の通う定時制には軽音楽部がなく、練習場所や道具はない。全日制の先生にお願いし音楽室の使用許可は得たが、道具は自分たちで調達することになった。そしてベース担当と楽器屋に行き、次の問題、資金問題にぶち当たる。エレキギターを弾くにはギター本体だけでは

足りない。アンプがなければ音は出ず、アンプとギターを繋ぐにはシールドが必要だ。他にもエフェクター、チューナーなど、細かいものが多く必要になる。ギターだけでも高いのに、いきなりそんな出費は払えなかった。教室でメンバーと相談しながら嘆いていると、ここで助けてくれたのが副担任の先生だ。音楽とは無縁なはずの先生が「昔バンドマンの知り合いからもらったギターがある」といって、妙な経緯の良いギターを貸してくれた。ギター本体を買う必要がなくなったため、とりあえずシールドとアンプを買い、最低限の練習ができるようになった。ベース担当の友人は趣味のための貯金を全てはたいて、ベースや必要な機材を買い揃えた。生徒の本気に影響され、かなり渋っていた担任も、自腹を切って電子ドラムを買った。ここでようやくバンドの練習が始まった。練習が始まったといっても、メンバー全員が楽器を持っているだけのド素人。他の部活の関係で、音楽室に集まって練習ができるのは毎週水曜日の放課後三十分しかないため、まずは各々で基礎を固めることになったが、ここでも問題が発生。私はネットの情報を参考にコード練習から始めたが、指の形をたくさん覚えなければならず、早速挫折しかけた。弦を押さえるのに慣れなくて、指の皮がしょっちゅうめくれていた。指が痛くて練習ができない日々が続き、覚えるだけのコード練習にも飽きてきた。ギターに向いていないのではないかとも考えていた。そんな中、父の言葉を思い出した。それは「何事も楽しめ」という言葉だ。この言葉は、何から手をつければ良いか分からない時、行き詰まった時に、私を導いてくれる言葉だった。私は思い切って練習方法を変えた。私はいきなり、バンドメンバーと決めていた課題曲を練習することにした。その曲は初心者におすすめとされていた簡単な曲だったが、基礎練習をすっ飛ばしていた私にとってはかなり難しかった。それでも曲を弾いているという楽しさがあり、夢中になって練習した。いつのまにか一曲演奏できるようになり、基礎もマスターしていた。

　練習が軌道に乗り、私は自分のギターが欲しいと強く思うようになっていた。買うお金もないのに楽器屋に行き、あるギターに一目惚れしてしまった。店員さんが、あまりお店には入ってこない人気のギターで、いつ無くなるかも再入荷もわからない、早い者勝ちの商品だと教えてくれた。あのギターでステージに立ちたいと

思ったが、当然買うことはできなかった。後日、機材などを見るために父と楽器屋に行くと、一目惚れしたギターはまだ残っていた。触れておきたいと思い試奏した。自分の弾きたいギターを弾いた時の感動は、今でも覚えている。欲しいと思うと同時に、買えないという現実を受け入れて、半ば諦めている自分もいた。父がいきなり、「そのギターいつ無くなるかわからないんでしょ？　無くなる前に買っときなさい」と数万もするギターの費用を立て替えてくれた。買って欲しいと頼んだことはない。父は私の気持ちを察し、お金を出してくれた。一目惚れしたギターを手に入れた嬉しさと、父への申し訳なさ、感謝が入り混じり、帰りの車の中ではありがとうと言ったきり、何も話せなかった。父が口を開いた。「俺の友達でめっちゃギター上手いやつがいてさ、お前もあんな感じになれるのか？　買った以上は最後まで頑張れよな！」と言ってくれた。私は父が買ってくれたギターでステージに立ち、かっこよく演奏してる姿を見せると心に誓った。

各々が個人練習に励んだことで、短い全体練習の中でもなんとか最初の課題曲が完成した。本番に演奏する曲を決める中で、また新たな問題が発生。ボーカル担当の友人が、方向性の違いで脱退したのだ。というのは大袈裟だが、彼の声質を生かせる曲と、バンドとしてやりたい曲が違ったため、本人からの申し出で今回は不参加となった。バンドの顔であるボーカルがいなくなり、他に歌える人もいない。このままでは文化祭どころか、バンド解散の危機である。散々困った結果、他校の定時制に通う中学校の同級生に、白羽の矢が立った。同級生は快諾してくれたが、これは本人だけの問題ではない。文化祭は学校単位で展示や発表が行われ、他校の生徒と合同での発表は前例がない。既に文化祭への申し込みは済んでいたため、担当の先生にメンバーの変更と、他校の生徒と合同で出演したいということを伝えた。相当無茶なお願いをしている自覚はあったが、ここで諦めることはできなかった。しばらくの間はボーカル無しの、出演できるかすら分からない状態が続いたが、それでも今まで通り練習を辞めなかった。最終的に許可が下り、出演が決まった。他校に掛け合ってくれた先生や、出演の許可をしてくれた先生方には、感謝しかない。

新しいギターにも慣れ、ボーカルを招いての練習も行われた。演奏する曲も形になり、ようやく文化祭が見

えてきた。そんな中突然、父が救急搬送された。いきなりの出来事に頭が真っ白になった。しかし父が運ばれるのは初めてではない。「まただよー」と笑顔で帰ってくる姿を何度も見ている。だから今回もひょいと乗り越えるだろうと信じていた。そう信じることで、心を落ち着かせていた。そんな思いとは裏腹に、父の病状は深刻だった。倒れた直接的な原因は分からず、運ばれてから二日目には意識がなかった。透析を回し、手術を行った。しかしそれは試験的なもので、手術をしても治るかは分からないと言われていた。次の日の朝五時半、父の容体が悪化したと電話があった。私たち家族は急いで病院に向かった。集中治療室に父がいた。指や足先に血の気がなく、触っても体温がない。人工呼吸器などの管がたくさん体に入れられている父を目の当たりにして、言葉が出なかった。病院について二時間ちょっとが過ぎた頃、父は心肺停止になった。父は数年前に癌を患い、余命宣告まで受けていた。治療を重ねていた父の体はすでにボロボロで、電気ショックは効果を期待できないと言われた。家族で話し合い、延命治療はしないことになった。頭が真っ白になり、そこからのことは記憶が曖昧だ。父がいない。この事実を私は到底受け入れることができなかった。お通夜、お葬式が終わり、父の家の片付けをしていた時、父が本当にいないことを実感し、涙が溢れて止まらなかった。

しばらくは片付けなどでとても慌しく、学校生活もままならなかったが、父のことが一旦落ち着いたところで、ギターの練習を再開した。文化祭に出場しないという選択肢もあったが、その選択をすることはなかった。父に演奏を見せることはできないが、父の買ってくれたギターで、父の応援を思い出しながら、一心不乱に練習した。何かに熱中している時間が、その時の私には必要だった。文化祭当日、私はガチガチに緊張していた。この日に至るまでに立ち向かった困難は数知れない。バンドを諦める理由は何個もあった。それでもやめなかったのは、最後まで一緒に練習してくれたバンドメンバー、ギターを貸してくれた副担任の先生、機材についてサポートしてくれた店員さん、急遽ボーカルを引き受けてくれた他校の親友、出場を認めてくれた先生方、そして、背中を押してくれた父がいたからだ。何かが少しでも欠けていたら実現することはなかった奇跡のステージ。このステージに立てる有り難みの分だけ、緊張が押し寄せ、不安でいっぱいだった。そこでまた、父の言

葉を思い出した。

「何事も楽しめ」

そうだ、楽しむことが第一歩だ。そして迎えた本番。ステージでのことは、実際に演奏していた私たちより、聞いてくれていた観客の方がよっぽど覚えているだろう。私はとても楽しかったという記憶があるだけで、他のことは正直全然覚えていない。客席からの盛大な拍手で、どうやら成功したらしいということが分かった。発表後、学校の人たちが「めっちゃかっこよかった」とたくさん褒めてくれた。皆に囲まれ改めて、挑戦できたことへの嬉しさ、諦めなかったことの価値を知った。困難を乗り越えた先には、素晴らしいステージが待っていた。これからも私は様々なことに挑戦する。行き詰まった時は父の言葉を思い出す。何事も楽しむことを第一に、どんなことが起きても乗り越える。挑戦できる環境、周りに支えられて生きている自覚を持ち、感謝を忘れずに進んでいく。